



Title	学習者が期待する教師の役割 : 半構造化インタビューの結果から
Author(s)	小池, 真理; Koike, Mari
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 8, 99-108
Issue Date	2004-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45650
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC008_007.pdf



学習者が期待する教師の役割

－半構造化インタビューの結果から－

小池 真理

[Abstract] : While many Japanese teachers place great importance on their knowledge and methodology of teaching Japanese, a paradigm shift stressing self-development has taken place in recent years. This shift has emphasized the necessity of teacher introspection. As well as reflecting on their own resources as teachers, teachers need also to consider learner resources, so that they can understand learners' beliefs, learning styles, and feelings as well as learners' needs and readiness.

This paper identifies the most important roles expected of teachers by learners, based on semi-structured interviews. The results show that learners expect teachers to encourage learners in finding appropriate learning methods and in the acquisition or development of independent attitude and motivation, as well as to understand learners' individual and affective conditions. The paper demonstrates the importance of understanding learners' beliefs and of developing observational skills.

1. はじめに

1990年代後半まで、教員養成においては「高度の専門性と実践的指導力」といういわゆる「専門性」に焦点が置かれていた(尾白, 1999)。しかし、その後教師の人間性、さらにその中でも「自ら高めようとする事」の重要性が唱えられるようになった(波多野, 1988)。そして、平成9年の教育養成審議会で新時代の教員に求められる資質・能力に関して議論され、西(1999)は今後特に求められる具体的資質能力として、課題解決能力の中での「継続的な自己教育力」を挙げている。また、日本語教育においても岡崎・岡崎(1997)が「自己研修型教師」の必要性を提起し、「これまでの教授法や教材のもつ可能性を批判的に捉え直し、これまで無意識に作り上げてきた自分の言語教育観やそれに基づいた教授法やテクニックの間

題点を、学習者との関わりの中で見直していく作業を自らに課す」ことが教師各自に求められると述べている。以上の流れの中で、近年日本語教師（以下、教師）の資質は、「人間性」「専門性」「自己教育力」の3本の柱で構成されると言われている（横溝、2002）。そこで、河野（2004）は時間的制約がある教師養成プログラムにおいては「養成すべきものは、『専門性』よりも『自己教育力』だ」と主張している。さらに、広島大学の日本語教育実習では『『人間性』と『専門性』を、教師自身の努力で高めていくエネルギーとなる『自己教育力』の向上を図ることで、教育実習後も継続して教師としての成長をし続ける人材を育成したい」（松崎、2004）という考えのもとに「自己教育力」の養成に重点が置かれている。松崎（2004）が述べている「継続して教師としての成長をし続ける」ということは、教師養成課程の学生のみならず、現職の教師にも求められることであろう。

八木（2004）は、13名の現職教師へのインタビューの結果と先行研究を基に質問紙を作成し、119名の現職日本語教師を対象に言語教育観に関する質問紙調査を実施した。その結果、よい教師像の枠組みとして「授業技術」「学習者支援」「関係知識」「授業への意欲」「授業直結知識」の5因子を抽出している。しかし、ここでは「専門性」「人間性」に関する因子は抽出されているものの、「自己教育力」に関する因子は抽出されていず、質問項目にも含まれていない。つまり、現職日本語教師は「自己教育力」の重要性に関して認識していない傾向にあると言えるであろう。

教師としての成長を続けるためには、教育現場での協同作業の中で自身の行動及び日本語学習者（以下、学習者）の行動、様子を把握し、そしてそれを分析、評価して改善を継続していくことが必要である。つまり観察、内省が教師の重要な活動の一つとなるわけである。内省を行うためにはそのリソースが必要となり、教案、授業メモ、他の教師との相互交流、アドバイスなどに加え、自分自身の教育ビリーフを認識していることも重要である。同時に、学習者側から発信したリソースも不可欠であり、学習者のニーズ、レディネスはもとより学習者ビリーフ、学習スタイル、精神的状況なども把握しておくことが効果的な内省に繋がると考えられる。したがって、教師がよりよい教師であるためには、学習者が期待している教師の役割を把握することを忘れてはいけない。学習者の考えを知ることは、彼らに対する理解力や観察力を強化することに繋がるであろう。それでは、

はたして学習者自身は教師に対してどのような役割を期待しているのだろうか。そして教師はそれをどれだけ把握しているのだろうか。これらの疑問を解決することが望まれる。

そこで、本稿では学習者が期待する教師の役割を明らかにするために調査を実施した。調査方法は、教師が予め準備した質問項目に回答する方法では、本来学習者が期待している本質は見えてこないと考え、回答の自由度の高い半構造化インタビューを採用した。

2. 調査の概要

2.1 調査の目的

本調査は、以下のことを明らかにすることを目的とする。

- 1) 初級の学習者は教師に対してどのような役割を期待しているか。
- 2) 初級の学習者は学習者自身の役割をどのように捉えて、教師の役割を期待しているのか。

2.2 調査対象者

調査対象者は国立大学の日本語研修コースを終了した学習者26名である。7名は2002年4月、8名は同10月、11名は2003年4月に来日し、15週間の集中コースのゼロスタートクラスに入った研究留学生および教師研修生である。男性18名、女性8名で平均年齢は28.6歳、出身国はフィリピン、バングラディシュ、ギリシャ、ナイジェリア、コロンビアなど19カ国となっている。母語環境での日本語学習経験がある場合は、その時の教師像の影響を受ける可能性があるため、今回はゼロスタートの学習者のみを調査対象とした。コースは文法の授業のほか漢字、作文、読解、会話、LLの授業で構成されていて、文法はチームティーチングで複数の教師が担当し、スキル別のクラスはそれぞれ異なった教師が専門に担当している。

2.3 調査の手順

調査は、15週間の集中コースの終了後（2002年7～8月、2003年2～3月、7～8月）、個別に半構造化インタビュー（フリック、2002）により実施した。半構造化インタビューを採用したのは、できるだけ自然な文脈の中で学習者の考え方を引き出すことを目的としたからである。調査は、「日本語はどうですか」という質問で始め、学習者の応答に応じた流れに従って行った。他の質問項目も含まれるため個人によって異なったインタビューの流れの中で、「教室の中での教師の最も重要な役割は何だと思う

か」、「日本語を学習するのに最も重要な学生の役割は何だと思うか」と尋ねた。教師の役割を教室の中と限定したのは、教室外での教師と学習者の接触がなく学習者にとって限定したほうがイメージしやすいからである。調査時は、日本語でも英語でもいいという指示を与えた。調査はMDレコーダーで録音し、その後この音声データから文字化データを作成した。

3. 結果及び分析

3.1 データの分析方法

本稿ではインタビューの結果の中から「教室内での教師の最も重要な役割」(以下、教師の役割)と「日本語を学習するために最も重要な学生の役割」(以下、学生の役割)に関するコメントを分析の対象とした。コメントは、例えば「I think if students have questions, teacher answer, explain adequately, so that students understand. And encourage the students always to do their bests, and always encourage the students speak Japanese.」のように複数の意味内容が含まれる場合は、これを「学生の質問に対して理解できるように適切に説明して答える」「学生がベストを尽くせるように励ます」「日本語を話すように励ます」の3つのコメントと見なした。以上のように数えた結果、コメント数は「教師の役割」が40、「学生の役割」が50である。これらはKJ法(川喜多、1996)を用いて分類を行った。KJ法は既成の概念に捉われずボトムアップで情報の処理を行うことを目的としている。すなわち、先行研究などで示された枠組みにそれぞれのコメントを当てはめていくのではなく、個々のコメントを1枚ずつ紙に書き、それぞれの紙同士の間で内容が同じ、また非常に近いものを集めて小さいグループにし、さらにその小さいグループ同士を集めて大きいグループにしていく手法である。例えば、上記のコメント「学生の質問に適切に説明して答える」は、まず「適切に説明する」とし、次に説明の方法に関するカードを集め「説明」という名前を付けた。それから「簡単な方法で教える」などと共に一つに集め、「教え方」という名前を付けた。

3.2 結果

コメントの分析の結果、教師の役割は4つのグループになり、それぞれ「授業内容・技術」「学習者への支援」「個々の学習者の状況理解」「教師自身の特質」と名付けた。また学生自身の役割は5つのグループになり、

「授業への参加姿勢」「学習に対する姿勢」「言語使用」「人との相互交流」「自立的姿勢」と名付けた。個々のカテゴリーの内容は、表1に示す。

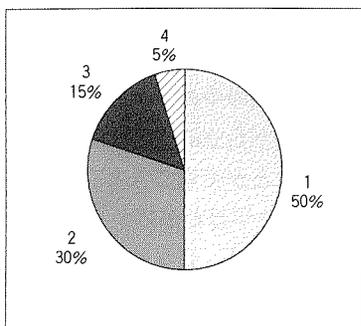
表1 教師・学生の役割の分類

教師の役割 40	学生の役割 50
1. 授業内容・技術：20	1. 授業への参加姿勢：9
1) 教える内容 5	参加すること 3
母語話者の発音、読み方 1	先生に従う 2
文法規則を説明 1	説明をよく聞くこと 2
知識を与える 1	積極的であること 2
どの文型が重要か教える 1	2. 学習に対する姿勢：14
教える項目を示す 1	1) 勉強する 9
2) 教え方 9	一生懸命勉強すること ² 3
よりよい方法で説明 1	勉強すること 2
簡単な方法で教える ¹ 3	継続的な勉強 3
明確な説明 2	すぐ復習すること 1
適切に説明 1	2) 具体的な学習 3
理論と実践を結びつける 1	構造を覚える 1
注解のシートを与える 1	覚える 1
3) 目的 4	理解と暗記の組み合わせ 1
学生に理解させる 4	3) 教室内学習 2
4) 教室活動 2	学習しようとする 1
多くの絵を使用 1	できるだけ多く掴むように 1
ピアディスカッション 1	3. 言語使用：4
	日本語でのコミュニケーション 2
2. 学習者への支援：12	日本語使用 1
1) 学習方法 3	教室外での応用 1
学習方法のアドバイス 3	4. 人との相互交流：9
2) 学習を促進 6	1) 学生と 2
学生を励ますこと 3	学生同士の競争と相互交流 1
多く学習できるように励ます 1	学生同士で復習する 1
ベストを尽くすように励ます 1	2) 先生と 6
日本語を話すように励ます 1	先生・学生と相互交流 1
3) 情意面の支援 3	先生への協力、協同、感謝 1
興味を持たせる 1	先生と協同 2

リラックスさせる	1	先生とコンタクトを取る	1
ユーモアを示す	1	わからない時は聞く	1
3. 個々の学習者の状況理解：6		3) その他	1
1) 全体的状況を理解	2	望みを失った時助けを要請	1
2) 授業内での観察	4	5. 自立的姿勢：14	
学生がどう感じているか	2	1) 自身の心がけ	7
学生のムード	1	ベストを尽くす	3
学生の理解度	1	あきらめない	1
4. 教師自身の特質：2		努力	1
教えた経験	1	理解しようと努力する	2
魅力的なこと	1	2) 姿勢	7
		興味を持つ	2
		自己の動機付け	1
		必要性を自分に説得	1
		学習の目的意識を持つ	1
		責任を持つ	1
		オープンマインド	1

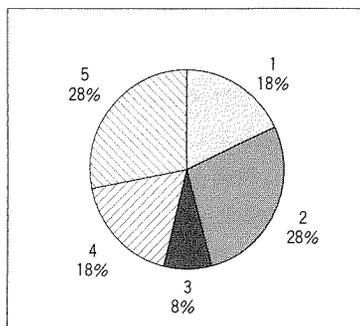
次に、学習者が重要視している教師の役割の全体像が見えるように、表1をグラフ1、グラフ2にまとめた。グラフ内の番号は表1で示された番号を表している。グラフ1の「教師の役割」では、2の「学習者への支援」と3の「個々の学習者の状況理解」の合計45%が、1の「授業内容・技術」の50%とほぼ同等の割合となっており、授業内容・技術と同様に学習者の支援、状況理解に重要性を感じているようである。また、学生の役割に関しては、2の「学習に対する姿勢」と5の「自立的姿勢」が同じ割合になっており、自立的姿勢を持つことも重視している様子が伺える。さらに、1の「授業への参加姿勢」と4の「人との相互交流」も18%と同じ割合になっていて、クラス内で教師の説明を聞き、指示をこなすだけでなく、学習者同士、あるいは学習者と教師との両方向の交流を重視しているようである。

グラフ1 教師の役割



- 1：授業内容・技術
- 2：学習者への支援
- 3：個々の学習者の状況理解
- 4：教師自身の特質

グラフ2 学生の役割



- 1：授業への参加姿勢
- 2：学習に対する姿勢
- 3：言語使用
- 4：人との相互交流
- 5：自立的姿勢

4. 考察

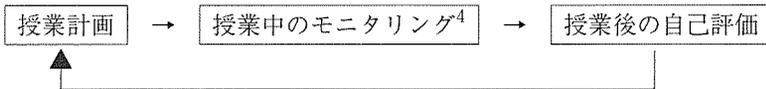
「授業内容、技術」に関しては、ほぼ予想できる範囲のコメントであろう。しかし、その中で「どの文型が重要か教える」と「理論と実践を結びつける」に関しては、コメント数は少ないものの教師が認識している必要があることである。なぜならば、ともすれば日々の教室活動の中では、既存の教科書に沿って順番に、且つ同じ重み付けでそれぞれの文型を教えがちだからである。これらのコメントは、学習者が目的とする言語活動に必要な文法は何なのか、実際の日本語使用はどのようになっているのかを、教師が考えておく必要があることを示唆しているであろう。

また、「学習者への支援」の中で特筆したいのは、3名の学習者が学習方法のアドバイスをしてほしいと述べていることである。特に母語や学習言語の構造が日本語と全く違う場合、どのように学習を進めていくか戸惑い大きいようである。これについては、小池（2004）でも到達度の低い学習者に対して適切な学習方法を探る支援の必要性が言及されている。個々の学習者と、日本語の学習観、今までの学習スタイルなどについて話し合い、問題を抱えている学習者には早い段階から適切な学習方法を探る支援をしていくことが重要な役割と言えよう。八木（2004）が作成した質問紙の項目には、この学習者支援に関わる項目は含まれていない。適切な

学習方法を探る支援の必要性に関しては教師側の認識が不足していると言えるかもしれない。

「学習者への支援」に関しては、その中の「学習を促進」と「情意面の支援」についてコメントした全員が、学生の役割の中の「自立的姿勢」に関するコメントをしている。ここから、学習者が自立的姿勢を獲得また発展するために教師からの支援を期待していることが推察できる。しかし、一方「自立的姿勢」に関してコメントしていない学習者が13名³存在する。自立的姿勢への意識が高い学習者と低い学習者では、異なった方法で支援をしていく必要があると言えるかもしれない。

「個々の学習者の状況理解」は学習者への支援につながることもある。ここで注目したいのは、授業内での観察を期待していることである。教師が準備した教案どおりに進めるだけでなく、流れの中で学習者の理解度、集中力がどの程度なのか、学習者がどう感じているかを把握しながらクラス活動を調整していくことが期待されていると言えよう。これは、教師のメタ認知的教育（Hartman, 2001）を望んでいることを示していると考えられる。メタ認知的教育とは、下記の図のように授業前の計画、授業中のモニタリング、授業後の自己評価の3段階で十分に内省、熟考して、この



サイクルを継続していくものである。学習者が期待しているのはこの2段階目の授業中での観察である。授業中に学習者の理解度、行動、心理的状況、興味⁵を観察し、それに対してフィードバックや調整を行うことを期待していると考えられる。ただし、本調査ではインタビューの質問が「教室内での教師のもっとも重要な役割」のように「教室内」という言葉を使用したため、教室内に限定されたコメントが出てきたことも考えられる。

以上、学習者が期待している教師の役割を分析したが、必ずしも全ての期待に答える必要はないと考える。重要なことは、学習者が何を期待しているか、さらに何を考えているかを把握することである。つまり、一般的に「学習者は～」ということではなく、それぞれの教師が教えている個々の学習者の考え、期待を把握することである。それにより、学習者への理解も深まり、彼らに対する観察力も増し、ひいては内省力の増大につなが

るであろう。その中で、学習者との話し合いを通し、必要に応じて期待・要求を受け入れていくべきであると考ええる。

小池（2004）は、到達度の高い学習者ほど自律学習に対するレディネスの程度が高く、反対に低い学習者はレディネスの程度が低い傾向があると報告している。したがって、特に学習の上達の遅れている学習者に対する観察、話し合いを優先することが有効であると思われる。

5. まとめ

以上、本調査の結果と考察を述べたが、調査対象者によって異なる結果が出る可能性があることは言うまでもない。本調査では、ゼロスタートの研究留学生、教員研修生を調査対象者としているため、ほぼ国費留学生であり、高学歴で英語でのコミュニケーションが可能な成熟した大人であるという限定がある。したがって、多様な背景を持っている学習者であれば、様々な役割が教師に期待されるであろう。現場の教師が学習者の期待する役割をどれだけ把握しているかは言及できない。学習者を理解するためには、さらなる研究が必要である。しかし、教師自身がそれを把握しようという意識を持ち、その努力を継続することにより、学習者に対する理解力・観察力が高まり、さらに教師自身の自己教育力の強化に繋がると考える。

注：

1. 簡単な方法とは、学習者が簡単に理解できる方法を意味する。
2. 「一生懸命勉強する」「勉強する」を別項目にしたのは、「勉強する」という行動と「一生懸命に」という「どのように」勉強するか、ということを分けたためである。
3. 表1では、学生の役割の「自立的姿勢」のコメント数が14とあるが、1名の学習者が2つコメントしたため、学習者数は13名である。
4. ここでいうモニタリングとは、通常使用されている事後の振り返りの意味ではなく、現在起きていることをモニターすることを示している。
5. Hartman（2001）では、心理的状況、興味などに関する言及はなく、より学習そのものに焦点が当てられている。第二言語、外国語以外の科目の教育におけるメタ認知教育が論じられているものである。

参考文献：

- 尾白泰次（1999）「教員養成カリキュラムの実施状況」『新時代の教員養成・採用・研修システム』高倉翔編、pp.12-13 教育開発研究所
- 岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習：理論と実践』アルク
- 川喜多二郎（1996）『K J 法と未来学』中央公論社
- 河野俊之（2004）「自己教育能力の向上を目指した実習タイトル人数が多目の実習生を対象に」日本語教育学会国際研究大会ワークショップ ポスター発表資料
- 小池真理（2004）「日本語上達に関わるのはどのような学習者ビリーフかーインタビュー調査によるケーススタディからー」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集』pp.185-190
- 西穰司（1999）「新時代の教員に求められる資質・能力」『新時代の教員養成・採用・研修システム』高倉翔編、pp. 28-33 教育開発研究所
- 波多野久夫（1988）「望まれる教師の資質とその現実」『講座学校学5：育つ教師』波多野久夫・青木薫編著、pp.27-74 第一法規出版
- フリック・ウヴェ（2002）『質的研究入門ー人間の科学のための方法論』小田・山本他訳、pp.94-121 春秋社
- 松崎寛（2004）「自己教育力の向上をめざした実習ーアクション・リサーチなどを導入した実習ー」日本語教育学会国際研究大会ワークショップ ポスター発表資料
- 八木公子（2004）「現職日本語教師の言語教育間ーよい日本語教師像の分析をもとにー」『日本語教育論集』20. pp.50-58
- 横溝紳一郎（2002）「日本語教師の資質に関する一考察ー先行研究調査よりー」『広島大学日本語教育研究』広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座』12.pp49-58
- Hartman, H. J. (2001). "Teaching Metacognitively", *Metacognition in learning and instruction : Theory, Research, and Practice*. pp.149-172 Kluwer Academic Publishers

こいけ まり（留学生センター非常勤講師）